



アインシュタインの世界

フランソワール・バリバール 著

佐藤勝彦 監修

知の再発見双書 59, 創元社

1996年7月20日発行

B6判変形

160頁, 定価1,400円 (本体1,359円)

読み物

お薦め度

☆☆☆☆★

この本は相対性理論で有名な物理学者アルベルト・アインシュタインについてかかれた本である。しかし、「世界」とあるように、単なる伝記ではなく、といて相対性理論の専門学術書でもない。一言でいうと、アインシュタインに関するもろもろのことを、コンパクトにしかもわかりやすくまとめた本であるといえよう。頁数が多くないこと（及び後で述べる写真の多さ）から予想できるかもしれないが、既にアインシュタインの伝記物や相対論の本を読んだことがある人が、目新しいことを期待して読むと、多少物足りないかもしれない。むしろ、はじめての人、或いは、短時間におさらいをしたい人に最適の本ではないかと思われる。

本としては小さい方（文庫本を少し大きくした程度）であるが、図版に力を入れているようで、まず何よりも、豊富な写真に圧倒される。幼少期から晩年にいたるアインシュタインの多彩なポートレート、風刺画、歴史的写真、自筆の論文や式など、写真集としても楽しめること請け合いである。欲を言えばもう少し大きな本にしても良かったかなと思われる位である。双書の副題にある「絵で読む世界文化史」というのも肯ける。文章を補足する写真や具体的な資料（部分的にカラー）が至る所に要領良くちりばめられ（写真や絵がない頁は数えるほどしかない）、写真の解説を拾い読みするだけでも楽しめる。

次に本書の内容を簡単に紹介しておこう。本文の構成は歴史順に、生い立ち、成長に沿ったものになっており、章立ては、1. 理解への情熱、2. 物理学の危機、3. 1905年:奇跡の年、4. 物質、空間、時間、5. 有名人として、6. 孤独な長老、7. アイン

シュタインの遺産、である。1, 5, 6章が伝記主体、2, 3, 4, 7章が相対論の誕生、量子論への貢献など、業績の平易な解説が主体となっている。このように、伝記と物理の話がバランス良く配置されており、理論の解説も、背景まで含めて記述されているので、物理アレルギーの人にも抵抗無く読めるのではないだろうか。相対論のエッセンスを知る、この時代の科学史の一側面という観点からも一読をお奨めしたい。

原著にはないと思われるが、資料編として、9つの著者の異なる小編が添付されており、アインシュタインの理論、人となりを補足する役目を果たしている。以下に示す題目を見ただけでも興味が湧いてくるのではないだろうか。順に、「アインシュタインの宇宙項はよみがえるのか?」（監修者自身による執筆）、「膨張する宇宙」、「ド・プロイが見たアインシュタイン」、「3組の物理学者夫婦」、「アインシュタインとフロイト」、「兵役拒否をめぐる」、「ユダヤ人の救済」、「ブレヒトのアインシュタイン批判」、「アインシュタイン神話」となっている。最初のもの以外にはそれぞれ要約がついており、ここでも読みやすさが考慮されている。

更に、巻末には、アインシュタイン関係年譜があり、写真図版の出典、より深く勉強したい人のために日本語の参考文献も添付されており、至れり尽くせりの内容である。

アインシュタインのことは良く知っているという人も、これから勉強しようという人にも、また、写真集としても、手元に置いておくと便利で役立つ1冊ではないだろうか。

末松芳法（国立天文台）